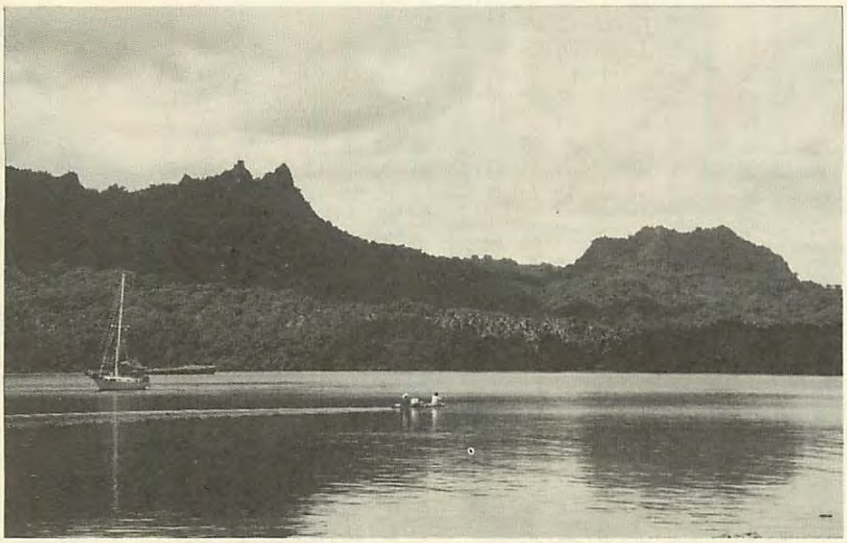


眠れる淑女の島　コスラエ（旧クサイ）島（12頁）

マーシャル方面遺族会
（旧クェゼリン方面戦歿者遺族会）
〒103　東京都中央区
日本橋人形町1－8－2
電話 03－3661－8760
FAX 03－3661－6241
振替東京 00100-0-93487
編集兼発行人　佐藤宗丕

平成九年度
慰霊祭 総会 直会の御案内

会長　佐藤宗丕

会員並びに会友の皆様にはお健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申しあげます。

恒例の慰霊祭、総会、直会を次の通り行いますのでお知り合いの方々をお誘い合せ、お身内の皆様ともども賑々しく御参集下さい。

日　時　平成九年四月五日（土）
　午前九時集合　靖國神社参集所前

慰霊祭　午前十時　御本殿

定期総会　午前十一時　靖國会館二階
　議　題　諸報告・予算・役員改選・その他

直　会　総会終了後（凡そ正午頃）靖國会館二階で開催します。四時閉会の予定。

◎出欠は同封のはがきで、出欠に拘わらず全欄に記入し、二月末迄に到着するよう御投函下さい。

会員名簿訂正に係わる事項は特に正確にお願いします。

◎直会に参加される方は同封のはがきにその旨を記入し一人三、〇〇〇円を郵便振替でお振り込み下さい。

◎年会費（二、〇〇〇円）は総会の日迄にお振込み下さい。

◎九段会館に宿泊を希望される方は、同封のはがきの所定欄に記入し、料金一人八、二四〇円（一泊二食付）を本部にお振り込み下さい。

申込み後の変更や取り消しは直ちに直接左記に電話し、本会にもその旨をお知らせ下さい。

（以下16頁へ）

目次

平成九年度 慰霊祭 総会 直会の御案内　会長　佐藤　宗丕……1
日本遺族会主催 慰霊友好親善玉砕の島に父偲ぶ……土田　利子……2
……土井　厚二……3
……井上　武彦……4
……藤家　功……4
単独現地慰霊行
兄弟姉妹八人で訪ねた父の足跡……鈴木とみ子……5
図書紹介……7
新聞きりぬき……7
高松宮殿下をお偲びして……川副　克己……8
マーシャル方面で戦没した軍艦と商船……9
戦没船員の碑……9
コスラエ島（旧クサイ島）の近況……安東　正夫……12
徳原　勇様を偲んで……佐竹　エス……14
鎮魂50年誌「南十字星」刊行……15
寄付者芳名……15
ロイ・ナムル（ルオット）のクーロング節子さん里帰り……15
名簿訂正（11）……15
平成七年秋　南佐渡吟行……斎田よしえ……16
本部だより……16

玉砕の島に父偲ぶ

日本遺族会主催　慰霊友好親善訪問団
マーシャル・ギルバート諸島へ

戦没者遺児による初のマーシャル・ギルバート諸島慰霊友好親善訪問団（団長・清水良祐壮年部幹事他三十五人）は、十月十七日に出発、A班はマーシャル諸島の、B班はギルバート諸島の各地を訪れ、慰霊追悼と友好親善の各種行事を行い、全九日間の行程を無事終えて二十五日帰国した。

十月十六日、九段会館で結団式を行った一行は靖國神社に赴き、旅の出発を奉告その無事を祈願した。翌十七日、グアムに向け成田を出発、十八日早朝グアムからトラック、ポナペ、コスラエと経由し、A班は夕刻マーシャル諸島のクエゼリンの地を踏む。その後B班は同諸島のマジュロへ。十九日からそれぞれの父の眠る地に旅立った。

A班は玉砕の地となったクェゼリン、ルオットで散華した父たちの霊を弔う。マジュロに至り、同環礁の礁湖からミレ、ヤルートを望み、洋上慰霊を行う。さらに関係者のみでマロエラップ、ウォッゼに渡り、亡き父たちに呼びかけた。

B班はマジュロからギルバート諸島のマキン、タラワに飛び立ち慰霊の誠を捧げ、父たちの苦闘の跡を偲ぶとともにタラワの小学校を訪れ、AB班の団員が持ち寄った医薬品、学用品を寄贈した。

二十二日午前、マジュロの東太平洋戦没者の碑前で、大酋長等の出席のもと、マーシャル・ギルバート諸島全戦没者追悼式を挙行、二万四千余柱の英霊に感謝の黙祷を捧げた。その夜大酋長等を招いて懇談会を行い、総ての日程を終了した。

参加者

団　長　清水　良祐（日本遺族会）
マーシャル諸島（A班）
穂刈　直　井上　武彦　樋口三喜子
土井　厚二　大森　昭治　天野　好子
廣島　正光　廣上　敏夫　内藤　泰彦
石川　正興　土田　利子　澤田　月子
井上　篤幸　打矢　和子　鵜沼　久義
古川　龍尊　東地井義訓　上田　一夫
佐々木千鶴子
団長補佐　村上　篤（日本遺族会）
添乗員　斎藤　純一（小田急トラベルサービス）
ギルバート諸島（B班）
副団長　水落　敏栄（日本遺族会）
西城　毅　藤家　功　菅原　眞起
土屋　金衛　川島　昇　柴澤　宏
三好　孟英　森　幸一　竹田　昭一
森本　信好　山崎　幸代　大月　一生
廣瀬　芳一　山崎　道子
添乗員　田村　亮一（小田急トラベルサービス）

（日本遺族会広報資料より）

※右の慰霊友好親善訪問に参加した皆様の報告、感想文の一部を掲載します。長文のもの、日程等共通のものは一部を割愛させて頂きました。

厳しく　優しかった父

熊本県　土田　利子

十月十八日私達の飛行機はクェゼリン島に着きました。五十二年前死闘のあった玉砕の島です。胸がドキドキして涙があふれてきてどうしようもありませんでしたが、私達の緊張をほぐすようにレイン報道官やラポイント英子（ひで）さんと祐美子さん達がにこやかに迎えて頂きホット致しました。夜はイバイ泊。

翌十九日クェゼリンの墓苑の慰霊碑にそれぞれが持って来たお供えものを供え安らかに眠っておられる英霊の御冥福を心からお祈り申しあげました。

長身のコットレル司令官が公務御多用の中をお見えになり挨拶をされ、みんなと握手をされました。最高の感激感動のあと、レインさんの御案内で島内を一巡致しました。

昨夜まで心配されたルオット島へもOKが出て英子さんと井上さん達四人の遺児が機上の人となりました。永興丸のプレートも奇跡的に遺児の土井さんの手許に渡され御英霊のお導きと感動致しました。此の日もイバイ泊。

二十日は丁度日曜日で教会の鐘の音が印象的でした。コザッパリとした服装で三々五々教会に向かっていました。午後はサムソンさん達の案内でイバイの陸続きのグチグ島へドライブしました。日本軍の使ったトロッコや戦車の残骸や水上機の発着に使った桟橋などもありました。クェゼリン島と違って緑も生い茂り「夏草やつわものどもが夢のあと」の感慨しきりでした。チャー

学校訪問

ター機の関係で四時間余りクェゼリンでゆっくりできました。レインさん達が日没を見に連れて行って下さり、きれいな夕陽を見ているうちに、無性に父が恋しくなりました。父は子供の私から見ても真面目一方の典型的な軍人でした。己には厳しく他人には寛やかで、部下や後輩たちから慕われていたそうです。女学校三年生だった妹和子の死に目にも軍務で会えなかった父は辛かったと思います。それ以来なぜか私には甘かったようです。艦隊勤務が多くて留守勝ちだった父の比較的心穏やかに家族と暮らせたのは金沢の人事部長時代だった様に思います。でも父が一番喜んだのは兄（正清）の海兵合格の時で、母が、お父さまのあんなに嬉しそうにハシャイでいたのは珍しいと申していました。父の戦地からの便りに弟正興の海兵の試験を心配していましたが、父の戦死の後に合格通知がきたのは残念でした。

クェゼリン海岸で

中央はコットレル司令官

二十一日はマジュロで洋上慰霊の行事が行われました。美しい色とりどりの花環やお供え物を飾り二人の遺児が追悼文を読まれました。海に漂う花環はさながら御英霊が喜んでいる様に幾度も船の廻りを漂っていました。声の限り海に向ってみんな「おとうさーん」と叫びました。そして号泣しました。万感胸に迫り何時迄もいつまでも海に向って祈りました。

午後からはマジュロの平和公園で草とりに頑張りました。

二十二日は合同追悼式でした。大酋長の他、数名の酋長が参加して頂きそれぞれ献花致しました。

二十三日は山口さんの御案内でマジュロ島内を巡り海水浴をしたり、椰子ジュースも御馳走になりました。午後ウォッゼ、マロエラップの四人の方達と団長他二人計七人が慰霊の為飛行機に乗られました。皆さんおとうさんの眠られるところに行く事が出来て本当によかったと思いました。夜の懇親会も私共に好意的でとても嬉しく、之も会の先輩の皆様が永年培った親善の賜と頭の下がる思いでした。本当に感動の連続の毎日でした。同じ境遇の心の通じ合う同志の慰霊の旅に参加できた喜びをかみしめております。

（八年十一月十二日）
（秋山門造命　長女）

ルオット海底よりの遺品

神戸市　土井　厚二

父は三井船舶の船長でした。昭和十八年休暇中の父に、系列会社　大洋興業の永興丸の船長が盲腸炎になったので一航海だけ乗船してほしいと要請がありそれが最後の航海になりました。

クェゼリン環礁のルオット島付近で戦死したと聞いていました。昨年の秋「戦没船を記録する会」から示された記録には、十八年十二月五日空爆を受け機関室が破壊され、秋葉山丸に曳航されて本土に戻る予定であったが十九年一月三十日に大規模な空爆を受け船員四十六名戦死、沈没とありました。

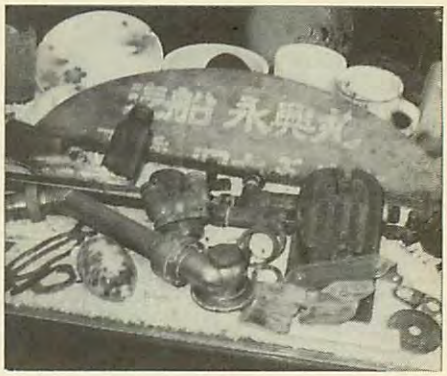
当時幼稚園児であった私は船乗りになって父が戦死した所に行ってみたいと思っていました。

成長して神戸商船大学を卒業して、父と同じ三井船舶に入社しましたが一般の商船はマーシャル方面の航路はなく目的は達せられないまま月日は過ぎ去って行きました。

昨年港運会社を退職した私は妻と共にマーシャル諸島を訪れたいと思い、日本交通公社に調べて貰っていたところ、今年の一月二十七日妻が喘息の発作で急逝してしまいました。五十一歳でした。

今年の春、日本交通公社に再び本格的調査を依頼しました。八十七歳になる母や姉達、妹も是非行きたいと云いましたがとりあえず兄と二人で下見に行くことにしました。

スケジュールも決まり用意万端整った四月三十日、現地のアメリカ軍司令官から日本交通公社に「クェゼリンは米国陸軍の重要基地であり、残念乍ら許可できない」との手紙がきました。さらに調べているうちに本会のことがわかり、佐藤会長さんのお力添えでこの度の慰霊訪問団のメンバーに選ばれました。九月中旬会長さんの所へご挨拶に行きましたところ、思いがけず会長さんが曾て現地で写された写真の中に、父が乗っていた永興丸の銘板があ



りました。ルオット空港に、海底から引き揚げられた遺品が展示されていたのだそうです。

会長さんから、現地でよく話をして譲って頂くことを頼んでみては、とアドバイスを受けました。

十月十七日慰霊団一行は成田を発ちグアムで一泊し、十八日夕刻クェゼリンに到着して驚いたことに今回はルオット島行きは許可されないとのこと。その夜は満足に眠れませんでした。

次の朝、本日午後ルオットの遺児四人だけが訪島できることになった旨の吉報が入りました。米軍司令官の温かいご配慮にあらためて感謝しました。昼頃四人は日本人女性と共に約二十分の飛行でルオット空港に降り立ちました。空港ターミナルの入口附近にある展示ケースの中に永興丸の銘板が展示されていました。同行下さったラポイント英子（ひで）さんから空港の警備隊長さんにお願いして頂いた所、数分後「この銘板をさし上げます」とお返事を頂きました。なんと有難い事でしょう。私は、この嬉しさを云い現わす言葉を知りませんでした。

ルオットの墓苑は遺族会発行の「南十字星」にあるように美しく気高く拝されました。三千柱の英霊に安らかにお休み下さいと心からお祈りしました。

クェゼリンに帰り船の銘板のことをレイン報道官たちは「信じられない」「奇跡」だと一緒に喜んで下さいました。

私にとってこんな宝物に出合えることが出来て帰国後早速母に報告し父の霊前に供えました。私にとって心から満足出来る慰霊の旅をさせて頂きましたことを関係者の皆々様に心からお礼を申し上げます。それにしてもこの写真を撮って下さった会長様にあらためて感謝申し上げます。有難うございました。

（八年十一月一日）
（土井與市命　次男）

感動と感謝の九日間

東京都　井上　武彦

父　井上梅二郎の戦死したマーシャル諸島のクェゼリン環礁に行けるとは夢にも思っていませんでしたが、この度思いがけずメンバーに加えて頂き天にも昇る嬉しさでその日を迎えました。

九段会館での結団式には、日本遺族会の森田専務様始め関係団体の役職員の皆様から激励のお言葉をいただき、またお供え物をお預かりし、心引き締まる思いで出発いたしました。

十八日夕刻クェゼリンに着いたとき父の戦死したルオット島には行けないと聞かされ全身の力の抜ける思いがしましたが、翌朝一転してルオットの遺族四名のみの訪島が許され、蘇生の思いがしました。

ルオットの慰霊碑

明けて十九日、ルオット島で父が触れたであろう二十四航戦司令部跡の壁や、大きい椰子の木の幹に触れて、遠い所へ行った父を偲びました。

米軍が造成し、管理している日本人戦没者墓苑のたたずまいは、戦場跡にあり勝ちな殺伐さはみぢんもなく、むしろ気品の高さに胸を打たれました。殊に米軍の造った、菊の御紋章入りの慰霊碑に「ロイ・ナムル島の防衛のために生命を捧げた日本の勇士ここに眠る」と彫られているのを見て、今更乍ら米国人の懐の深さを感じさせられました。

二十一日の、船上での追悼慰霊も思い出に残るいい行事でした。

九日間の長旅に一人の事故もなく全員が心ゆくまで父親の慰霊を行うことができたのはありがたいことでした。

現地の皆様の心温まる接遇と、主催団体の役職員の御配慮、添乗員の奉仕に厚く感謝申しあげます。

（八年十一月七日）
（井上梅二郎命　二男）

ギルバート諸島を訪ねて

神奈川県　藤家　功（いさお）

平成八年十月十六日、九段会館で結団式を行ない、全員で靖國神社に参拝、十七日に成田を出発しました。途中の幾つかの空港では、きれいな民族衣装をまとい、花で髪飾りや首飾りをした人々が乗り降りしていたのも、珍しく眺められました。

クェゼリンでA班と別れ、マジュロで一泊して、翌朝小型チャーター機でタラワに向け出発、途中マキン島に降り慰霊の行事を行ないました。土地の方達の温かい心遣いと、もてなしに一同感激しました。

タラワへ向かう飛行機の窓から見える海は、どこまでも青く美しく光り輝き、ここで激戦があったとは到底思えない穏やかさでした。一時間程して少しずつ降下した時、タラワ島の姿がくっきりと見えて来ました。緑の美しい椰子の木々、海抜二米と聞いていましたが、海辺には細く長い道が続いています。環礁の内部は、浅い礁湖になっていて、エメラルドグリーン、外洋のダークブルーと黄味を帯びた海浜の砂でかもし出す三色の調和が素晴らしくその美しさに思わず嘆声をあげました。

飛行機から地上に降りた時、夢にまで見た赤道直下のタラワ島に遂に着いたのだ、本当に実現したのだと胸が熱くなりました。迎えのマイクロバスで思ったより涼しげなホテルに着きました。

南瀛の碑とマリア観音

連日の炎熱の為、会議室で追悼慰霊行事を行ない、それぞれが父への思いを述べ般若心経を唱えました。

翌日は、佐七特、第百十一設営隊、第三特根、第三特根司令部などの激戦の跡を巡り、お線香やお供物をそなえ御冥福を祈り、砂を拾い集めて大切にしまいました。

拝礼するたびに何処からか父の声が聞こえる気がします。風か波の音でしょうか。

最後に届いた手紙に、

身はたとえタラワの土と化するとも
果たさで止まじ大和魂

と書かれていたのが浮かんできます。最後にメモリアルパークの南瀛の碑と、マリア観音像にお参りしました。

翌朝、小学校を訪問しました。途中元気あふれるこども達が、はだしで車と競走して、追いついたり、離れたりしてきました。校門に着くと児童達が寄って来ました。始業時間前なので、小石を拾って一緒にお手玉遊びをしました。

先生が鳴らした鐘に、懐かしさを覚えながら教室に入り、お土産のボールペンやサッカーボール、正露丸、タオル、扇子等をプレゼントしました。児童全員が校庭に出て、歓迎の歌を上手に歌ってくれました。児童達に見送られて学校を後にしました。

空港の待合室の手前で三脚を立て、名残の写真を撮りました。飛行機を待つ間、過ぎし二泊三日のことが走馬灯のように浮かんできます。

やがて飛行機は、私達を乗せて飛び立ちました。「さようならタラワ、何時までも平穏でありますように」と心から祈りました。

（八年十一月八日）
（西城猛命　長女）

単独現地慰霊行

兄弟姉妹（きょうだい）八人で訪ねた父の足跡

茨城県　鈴木　とみ子

父鈴木八十次が戦死したとの公報をうけたのは、昭和十九年七月でした。

遺骨の箱の中は写真が一枚だけで、戦死の公報には戦死の場所も状況も記されていませんでした。海軍なのでどこかの島に漂着し、終戦も知らぬまま生きているのでは…戦後数十年たって何人かが生還された話を聞くと、もしやを信じたい思いで墓碑も造らず待ち続けていました。

平成五年十二月、朝日新聞の「声」欄で、五十年ぶりに父親の戦死地点を探りあてた千葉県の方の記事が目に入りました。記事の内容が父の公報の状況と似ているので、ご住所を新聞社に問い合わせた所、プライバシー保護のため教えられないがその代わりにと厚生省に問い合わせる方法を教えて頂きました。

その結果、厚生省の業務二課長様より、昭和十八年十二月十九日昭栄丸に乗組中、マーシャル群島のクェゼリン港において、敵機と交戦中戦死した事と軍歴をお知らせ頂き、遺族一同漸く心の整理がつき、平成六年に墓碑を建立しあらためて供養を行いました。

それからは、一日も早く慰霊に行きたいと思いながら、はるか南海の孤島ではと、半ば諦めておりましたが、偶々高萩市の安藤ヤス様から、所属しているマーシャル方面遺族会のことを聞き東京の事務所を訪ねました。

佐藤会長様はすぐ相談に応じて下さり、米軍の重要基地の同島に入島の許可を得て下さいました。

慰霊旅行の準備をしていた或る日、千葉県の腰川妙子様から一冊のご本と「私の父の戦友の鈴木一等水兵の御遺族では？」とのお手紙が送られてきました。

会長様が昭栄丸の遺族を探している腰川様に、我が家のことを知らせて下さったのでした。

奇遇に驚きました。腰川様は新聞に寄稿された方だったのです。ご本は「南海に散った父の戦争日記」で、激しい軍務の間に克明に記された日記の随所に出て来るのが、伝え聞いていた

父の行動そのもので、数葉の写真の中に腰川様のお父様と共に父の姿がありました。腰川様をお訪ねして、思いのたけを語り合うことができました。共に大正十五年徴兵で立場も同じ農民兵士でした。

遺族は、腰川様が三姉妹、我が家が八人の兄弟姉妹で、腰川様の御母様が八十六歳、我が家が八十五歳で共に五十年余の苦労が報いられ、それぞれ夫の消息に接することができたのです。

このようにして十一月五日、私ども遺児八人による念願の慰霊旅行が実現し南の海へ向け幻の父の姿をもとめ成田を発ちました。

会長様からは、靖國神社のご神酒、腰川様からは御父様の好物と共に、尼僧となられた二女の方が書かれたお戒名をお預かりし、同方面でお兄様が戦死された友人から託されたお供物とお戒名も持参し、八人共、始めての南洋行きですが、秋冷の日本から炎暑の南の島へ行く大変さなど考える余裕もありませんでした。

中央はコッテル司令官

機上から見える群青の海と紺碧の空に戦いの時代に思いを馳せながら、一刻も早く現地に近づく事を祈りました。乗客は殆んどが観光や新婚旅行の人達で機内の雰囲気にはそぐわない私どもでした。約三時間ほどでグアム島に到着し、激しい雨の夜を一泊しました。

六日朝、雨の中を出発し、トラック、ポナペ、コスラエ島等に立ち寄り夕刻クェゼリン島に近づくと、海上を覆っていた雨雲が途切れ美しい環礁が見えてきました。

午後五時、椰子の林と白い砂浜が陽光に輝く三十二度Cのクェゼリン島は、話に聞く極楽浄土のような気高さが感じられました。

空港には、報道官として遺族会とも馴染みの深い、マリアンヌ・レインさんが出迎えて下さって、他の入島者が厳重なチェックを受けている中をフリーパスで、レインさんが自ら運転する車で港に向かいました。レインさんにとっては、大層ご多忙な日だったそうですが、笑顔で私達を案内し、港では、アンロハサホテルの責任者イノックさんを紹介されました。

イバイ島は、上陸用舟艇を利用したフェリーで、三十分足らずです。折から、環礁に沈む夕陽の美しさは、吾が子らを迎える父の心のあらわれとも思えて只、胸が一杯になりました。

ホテルでは日系の親戚を持つイノックさん一家に家庭的な雰囲気で迎えられ、日本人好みの夕食のメニューに加えて、釣ったばかりの鰹の刺身までご馳走になり、ご家庭のみなさんとも楽しくお話合いをすることができました。

七日早朝、海辺に出て、腰川様から託された品々やお戒名牌と、父が植えた柿とみかん、菊の花、新穀米とお戒名牌を海に流し、それぞれ声を限りに父への思いをさけびました。早朝の為人気もなく、風波も心なしか静まった中で読経をして冥福を祈り、音楽の好きだった父を偲んで「ふるさと」「浜辺の歌」「椰子の実」などを涙ながらに合唱しました。波間に見え隠れする供養の品々が故国の方向西北へ流れて行くのをみて、どれだけ故郷へ帰りたかったかを思うと又泣けてきました。

九時半クェゼリン埠頭には、ワンピース姿のレインさんが出迎えて下さって、当日も多忙の日程にもかかわらず、自らハンドルを握って島内のあちこちを案内して下さいました。

かつて日本軍の中部太平洋の要衝だった島は、各所にレーダーのドームや軍事施設でものものしい雰囲気ですが、この美しい島がかつて激しい砲爆撃の的となった、地獄の島だった事を思い浮かべ弾痕だらけの日本軍のトーチカに息をのむ思いでした。

島の西端には、玉砕した日本軍の戦死者を米軍が埋葬した墓苑があり、赤い鳥居が建てられ、丁重に管理されていました。

戦後、マーシャル方面遺族会によって建てられた、同方面三万五千の英霊の慰霊碑には、各県名入りの石がモザイク状に、日本列島の形にはめこまれてあり、レインさんのはからいで全戦没者の慰霊の行事を行いました。

会長様から託された、靖國神社のご神酒や持参の供花、供物を供え、テープの「君が代」のラッパ吹奏で全員黙祷の後、読経、焼香をして、みたまのご冥福をいのりました。そのとき、多忙な日程の中をコッテル司令官が自ら車を運転しておいでになり、遠来の労をねぎらいながら、弔意を表して一人一人握手して頂き感激の極みでした。

この島で玉砕した日本軍の勇敢さを米軍の戦訓としてこの墓苑を大切にしているとの事でした。祖国の為、身命を捧げる同じ使命をもつ軍人として、幼くして父を失った八児への同情のご配慮は恩讐を越えて、父をはじめ泉下の英霊も照覧して頂けた事と思い、目頭が熱くなりました。

島を一周した後、港を見晴らせる西海岸の休養所で昼食をとりながら、途

中から同行した陸軍病院勤務の英子・ラポイントさんともお話することができました。戦死したお兄様を持つ彼女には慰霊団が訪れる度にお世話になり、先月の団体はルオット島まで同行して頂いたとの事でした。浜昼顔の咲き乱れる白い砂浜で私達は、時の流れを短く感じながらも、心ゆくまで父に語りかける事が出来ました。

午後二時四十分、お世話になった皆さんの見送りをうけ帰途につきました。

持参した靖國神社のお札に入魂した父も一緒に五十数年ぶりの帰国です。

平成五年の腰川様の新聞へのご寄稿の拝見から始まった、南海に眠る父を訪ねての旅路は、時間的にも距離的にも、長く険しい道でしたが無事に終了し老母に伝えることが出来ました。

奇縁で結ばれた腰川様や、厚生省、新聞社の皆様、現地訪問に大きなお力添えを頂いた佐藤会長様、安藤様、旅行社の皆様のご厚情にはお礼の申し上げ様もございません。

今回の慰霊旅行で、収集されながら未だ帰国できない御遺骨のあることを知り、一日も早い帰国の実現とこのような悲しみが再び起きない平和な時代が続く事を心から願わずにはいられませんでした。

（八年十一月十一日）

（鈴木八十次命　長女）

図書紹介

『太平洋諸島ガイド』
―南の島の今と昔―

著者は東京高等師範体育科卒、東京都立小笠原高校に十四年勤務して海に魅せられ退職後、夫人と他の一組の夫婦ともう一人の五人でチャーターしたヨットで父島をふり出しに、約一年かけて南洋の二十余りの島々を巡り歩いた貴重な体験を、新鮮な眼で軽妙にしかも正確に活写している。

書中に出てくる島は、グアム、ヤップ、トラック、ポーンペイ、コスラエ、タラワ、マキン、マーシャル諸島など我々に縁の深い島々である。

南洋に旅して誰もが感じるのは、南方民族と日本人の血のつながりの濃さである。著者は「星空を眺めながらの思索？は楽しかった。戦争、国家、宗教などが錯綜して、硬化した脳にも若返りの妙薬であった。生物、歴史、民族学的興味も増して、厳しい超離島の人からたくましい生き方を学ぶこともできた」という。さらに「訪れた島々はほとんどが太平洋戦争に関連していた。見知らぬ私達日本人が欧米人以上に歓待をうけたのは何であろう。光溢れる南の島々は、心豊かな人々の住む平和な楽園であった」と述懐している。

著　者　牟田　清

A5判二六五頁　二、三〇〇円

発行所　古今書院

『マウリ・キリバス』
（今日は、キリバス共和国）

紹介者　瀧　知道

「マウリ・キリバス」は、キリバス共和国（元英領ギルバート諸島）全般について書かれたものであるが、実際に現地に長く滞在し体験しなければ書けない内容である。いや、滞在しても研究心が旺盛でなければ、とてもこれまで実情を把握出来ないだろうと、ほとほと感じ入る。

著者の郡さんは、国際協力事業団と日本鰹鮪漁業協同組合連合会から派遣され、キリバス共和国海員訓練センター漁業科教官として、六年に亘りタラワに滞在し、現在は大洋水産株式会社常務取締役をしておられる。

なお、郡さんは、元日本海軍の軍人であり、遺族が慰霊巡拝のためタラワを訪れる度、献身的に世話をして下さり、現地に建ててある慰霊碑（ベシオの南瀛の碑、ブタリタリのアイネンカワ像、ブアリキの供養塔など）の保存にも常々心配りをして下さった。

この本は、キリバスの歴史、教育、戦争時代、現地人の暮らしから観光、キリバス語まで多岐にわたり、キリバス百科辞典であり、万能ガイドブックである。

著　者　郡　義典

A5判四〇五頁　二、〇〇〇円

発行所　近代社

新聞きりぬき

〈平成八年八月二十八日読売「気流」〉

平和祈る追悼式典は永遠に

遺族　埼玉県　岩上　馨一　58

――戦没者追悼式は、広い意味で死亡した軍人だけでなく、一般の戦没者や原爆犠牲者らの追悼のため国内各地で行われている。追悼式はあくまで犠牲者の御霊をまつる、日本国内で認められた荘厳な伝統行事であって、諸外国の反応を懸念したりする性質のものではないと思う。

従って、歴代首相が戦争の反省と哀悼の意をアジア近隣諸国に対して表明することと峻別して考えることが適当だ。何をはばかることがあろうか。

私の父は当時、海軍に志願し、艦船勤務で厳しい規制と訓練に明け暮れ、二回とも艦が撃沈されて長時間泳いで助かったが、三回目の空母勤務のとき戦死した。軍人は国家に忠誠を尽くし、黙々と辛苦に耐えて任務に邁進した。そうした厳しい過程があったことを忘れてはならない。国家に命をささげた魂のよりどころが靖國神社ならば、その場所で今日の発展の礎となった御霊を慰霊、追悼することは国として重要な行事の一つだと思う。

戦没者追悼式は、忌まわしい戦争を再び起こさないためにも、その誓いを新たにし、永遠の平和を希求しつつ、永久に実施されることが望ましい。

高松宮殿下をお偲びして

会友　川副克己

☆筆者は昭和八年に東京高等商船学校を卒業、同九年近海郵船（株）に入社、商船に乗組み昭和十二年に数隻目の乗船朝日丸が海軍に徴用され病院船となり、戦場勤務となった。

大東亜戦争勃発の昭和十六年九月に海軍に応召、十二月より第六根拠地隊所属第六京丸駆潜艇長としてマーシャル、ギルバート方面の作戦に従事。十九年一月から第五〇駆潜艇長として船団護送任務についた。

同年六月十二日、サイパン島沖で米空軍機の猛攻に遭い三十隻の船団は全滅し本人は重傷を負って七月七日横須賀海軍病院で左脚を切断。二十年九月応召解除（海軍大尉）

戦後は隻脚乍ら羅針儀自差修正（註1）を業として、手がけた船は六千隻を数えた。又、海事補佐人（註2）としても活躍、百八十件に関与し、海難防止と水産界に貢献された。

又各国の傷痍軍人会、退役軍人会との親善や、戦没者の慰霊、世界平和の実現に奉仕してきた。

本会の定例慰霊祭、直会には度々参加されている。

高松宮殿下の硫黄島訪問のことを「環礁」で読み、深い感銘をうけた。私も曽って殿下の温かいお人柄に接したことがあり、往時を思い出して殿下をお偲び申し上げた。

昭和十二年九月下旬、高松宮宣仁（のぶひと）親王が傷病兵の慰問を兼ねて朝日丸の巡視に来られた。殿下は当時海軍中尉で第三艦隊旗艦出雲に乗艦勤務して居られたものと思われる。

乗組の甲板、機関の各士官はそれぞれ予備士官の軍服と短剣をもっていたので、いずれもこれを着用、舷門を境に軍医官側と乗組士官側は船室壁を背にして一列横隊にならび殿下をお迎えすることになった。殿下が乗られた内火艇が舷梯につくと、一同〝気を付け〟の姿勢で待っていた。

殿下は舷門まで昇って来られると、にこにこしながら恰（あたか）も子供が遊んでいるような格好をされ、両側の手摺（てすり）に両腕を立て両足をあげてぶらぶら前後に二～三回振ったあと舷門のマットにとび降りて挙手の礼をされた。「そう堅くなるなよ」と言っておられるような気持ちがして一同緊張がほぐれた思いをした。陸軍歩兵の兄君の秩父宮雍仁（やすひと）親王と海軍の高松宮は御二人とも非常に平民的であると前々から聞いてはいたが全くそのとおりだと思った。

この時慰問を受けた傷兵達も非常に感激した。

昭和五十六年十一月二十五日、日本傷痍軍人会全国合同大会が、高松宮宣仁親王殿下、同妃喜久子殿下の御光臨を仰ぎ、北は北海道、南は沖縄に至る全国の両会（日傷第三十七回、日傷妻の会第十九回）代表二万七百余名が参加し、長崎県大村市の海上自衛隊大村航空隊格納庫を本会場に、屋外幕舎を第二会場にして盛大に催された。その時のおことばは次の通りである。

「去る昭和四十七年十一月だったと思いますが、広島市において開催されました日本傷痍軍人会と、日本傷痍軍人妻の会の全国合同大会に出席したことがあります。本日また大村市で皆様の元気な姿に接することができまして、大変嬉しく思う次第であります。

皆様は、かって国の命ずるところに従い、戦場に趣き負傷し、また病にたおれられたのであります。その後は闘病に専念されながら今日を迎えられたのでございます。

こうした皆様の愛国心と国民としての勲（いさお）は末永く日本国民に語り伝えられるべきものだと信ずるものであります。

顧みますと終戦から早くも三十六年になります。その永い年月を戦傷病者としてよく障害にたえてこられ、戦争犠牲者として世界平和を願いながらしかも日本の繁栄のためにそれぞれの地域社会において、めざましい活躍をしておられるということをうけたまわっております。

また、戦傷病者の夫を助け、子女の養育につとめ、そして家庭を守ってこられました戦傷病者の妻と家族の方々の、精神的苦痛と経済的苦労はまことに計り知れないものがあり、私も海軍におりました一人といたしまして、何とも申し上げようもなく、ひとしお深い感銘をおぼえております。

本年は国際障害者年であります。どうか更に健康に留意され、世界平和と、そうして私達の共同社会の繁栄のために一層心を合わせて、おのおのの道に発展、寄与されることを願ってやみません。そうして、皆様方とともに日本の将来の〝いやさか〟を祈る所存であります。ありがとうございました。」

高松宮、同妃殿下が御退場の際、御先導の日傷会長笹川良一夫妻と共に突然、全員起立している会員の席に歩を運ばれた。驚いたのは護衛官だがそれ以上にびっくりしたのは会員である。眼と鼻の先を両殿下と会長夫妻が通られたので恐れ多いが、もみくちゃのうえ感激の余り差し出す手に握手をされたから大変である。次から次と握手攻め。それでも両殿下は笑顔をたやさず「元気でよかったね。がんばるんだよ」と―。妃殿下もまた妻の会員に「御主人を大事にね」と優しく声をかけられ

た。こんな光景は我々の年代では到底考えてもみなかったことであり、これも傷痍軍人ならばこそとみんな感涙にむせんだのであった。

後で会長が「僕もだが、両殿下も手が痛い」と仰せられていたとのこと。このハプニングの仕掛人は会長だと思っていたが「両殿下御自身がみんなに会いたい」との思召しでその御意に従ったものだと聞き更に驚かされた次第である。このことは勿論各新聞、テレビで一斉に報道された。

註1　船体は磁気を帯びており、船体の修理、改造や年月の経過等により磁気羅針儀が狂って正しい北を指さなくなることがある。これを正しく修正する技術を自差修正という。

註2　船舶による海難事故（衝突、火災、人身障害等）は裁判所に相当する海難審判庁が処理しており、検察庁に相当するものを審判理事所、弁護士に相当するものを海事補佐人という。

マーシャル方面で戦没した軍艦と商船

わが国は世界有数の海軍国であり、海運国であったが大東亜戦争の結果、軍艦と商船の殆んど全部を失った。

マーシャル、ギルバート方面で戦没したのは次のとおりである。

艦（船）名	沈没年月日	沈没場所
戦艦長門	21・7・29	ビキニ環礁
空母葛城	21・7・29	〃
軽巡酒匂	21・7・1	〃
潜水艦イ19	19・2・2	ギルバート
〃 イ21	18・12・24	〃
〃 イ32	19・3・24	マーシャル
〃 イ35	19・1・10	ギルバート
〃 イ39	19・2・20	〃
〃 イ40	19・2・21	〃
〃 イ174	19・4・13	〃
〃 イ175	19・3・26	クェゼリン
〃 ロ38	19・1・2	ギルバート
〃 ロ39	19・3・5	ウオッゼ
〃 ロ40	19・3・28	ギルバート
〃 ロ60	16・12・29	クェゼリン
ぽるどう丸	17・2・1	ウオッゼ
豊津丸	17・2・1	マーシャル
神祥丸	17・7・9	クェゼリン
第1昭福丸	17・8・7	ウオッゼ
豊浜丸	17・10・8	〃
八海山丸	17・10・22	ミレ沖63浬
岩代丸	18・1・15	クェゼリン
興亜丸	18・4・4	マーシャル
磐谷丸	18・5・20	ヤルート
光島丸	18・5・20	マーシャル
第6高島丸	18・9・21	〃
立隆丸	18・11・21	〃
建武丸	18・12・5	ルオット
朝風丸	18・12・5	クェゼリン
永興丸	18・12・5	〃
立山丸	18・12・5	クェゼリン
長興丸	18・12・5	〃
第18御影丸	18・12・5	〃
第7拓南丸	18・12・5	〃
昭栄丸	18・12・19	〃
生田丸	19・1・12	エニェタク
第1南油丸	19・1・18	ヤルート
興津丸	19・1・26	ブラウン
秋葉山丸	19・1・30	クェゼリン
第2報国丸	19・1・30	〃
第3文丸	19・1・30	エニェタク
関丸	19・1・30	〃
桂丸	19・1・31	クェゼリン
第2南海丸	19・2・5	ミレ
第11富士丸	19・2・6	クェゼリン
竹浦丸	19・2・6	マーシャル
パラオ丸	19・2・6	クェゼリン
愛国丸	19・6・30	〃
海幸丸	19・9・15	マーシャル
第1和丸	19・9・15	〃

※軍艦は講談社発行「帝国連合艦隊」より、商船は、戦没遺体収揚委員会発行「太平洋戦争沈没艦船遺体調査大鑑」より転載した。「長門」ほか二隻は原爆実験によるものである。

戦没船員の碑

戦没船員の碑の建立まで

昭和十二年から満八年にわたり、太平洋全域から印度洋にまで及んだ戦争が終ったとき、わが国の海運、水産界は、本土沿岸の制限海域にとじこめられて、暗澹たるものでありました。

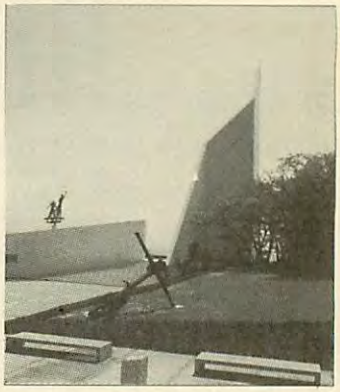
無理もありません。このいくさで、六万余人の船員が二、五〇〇隻、八五〇万総トンに及ぶ船と運命をともにし、海運、水産界は、文字どおり壊滅状態におちいっていたからであります。

今日、わが国の商船、漁船が、またその船員が、世界屈指の海運、水産国の基盤となって、祖国の繁栄に尽していることを思いあわせますとき、まことに感慨深いものがあります。

戦後失意の中にあって、報われることなく海底に眠る船員の霊を慰さめ、本来平和産業の士である船員が、二度と戦火の海を航くことのないようにとの祈りを籠めて、記念碑を建立する運動が、有志の間でいち早くはじめられましたが、占領下の特殊事情はこれを許さず、二十年余が空しく経過しました。

しかし、この間にも、目ざましい復興発展を続けた海運、水産界にあっては、戦没船員の慰霊と海洋永遠の平和を希求する人びとの願望が、次第に強い昂りをもって拡がってきました。

昭和四十一年秋、財団法人日本海事


大碑壁に続く中央碑

広報協会が中心となって、記念碑建立の具体化を図ることになり、海事関係官庁、団体によって、「戦没船員慰霊顕彰碑建立準備委員会」が組織され、建立地の選定、碑の構想等、碑建立に必要なことがらを検討した結果、当時県立自然公園予定地として国の管理下にあった現在の〝観音崎〟を最適地として、ここに碑を建立することについて関係方面のご了解を得たため、碑の設計を吉村順三東京芸術大学教授に、群像の制作を同学菊池一雄教授に依頼するとともに、従来、慰霊碑、顕彰碑または記念碑とよばれていたこの碑を〝戦没船員の碑〟と呼ぶことにし、昭和四十一年一月二十三日「戦没船員の碑建立会」を設立して、建立事業の具体化に踏み出しました。

同四十四年七月二十日〝海の記念日〟に、この会は、運輸大臣から「財団法人戦没船員の碑建立会」として法人設立を許可されたため、建立資金総額一億四千万円の募金を全国民に呼びかけるとともに、戦没船員の調査、碑の構想の具体化等、碑建立へと進みはじめました。

この募金には、政府補助金をはじめ、海事関係団体会社、各界団体会社の補助金、寄附金及び内外航船舶、漁船の乗組員、海事関係官庁、団体、会社の役職員、各地の小中学生からの個人募金が寄せられ、昭和四十八年五月末、その受領額は一億四千百万円余に達し、目標を百万円も超過する好成績を挙げることができました。

一方〝戦没船員の碑〟は、四十五年三月その構想が成り、同年六月三十日起工式を行ない、株式会社竹中工務店によって施工され、翌四十六年三月十八日、碑文石中にかねて調査完了した、戦没船員六万三百三十一人の名簿を奉安し、三月二十五日完成いたしました。

昭和五十六年四月、財団法人日本殉職船員顕彰会の設立に伴ない、戦没船員に加え、殉職船員の名簿をも奉安することになり、平成八年三月末日現在の奉安者は戦没船員六万六百人、殉職船員一千六百十七人、合計六万二千二百十七人となっております。

観音崎の潮騒に囲まれて

〝戦没船員の碑〟を、日本の代表的な海の記念碑とするために、東京またはその周辺で、交通の便がよく、しかも景色に勝れ、加えて航路筋からも望見できる場所として、多くの候補地の中から、日本の海の玄関口である観音崎の丘陵の一画が選ばれました。

この麓から先端が望まれる白磁の大碑壁は、東京湾に出入する船からは、三角の帆の如く、或いは白衣の立像の如く、針路につれて刻々に変化してみえます。

この二十四米の高さをもって空に立ち昇り、南を指し示す大碑壁には、戦没船員のみ霊に対する祈りと、海洋永遠の平和への願いがこめられており、これと中央壁に抱かれるように祭場があって、ここで、追悼式などの行事が行なわれます。

この祭場の南端に据えられた水平の碑文石は、遠く望まれる太平洋の水平線と呼応して、海底深く眠る戦没殉職船員の鎮魂を願う気持ちを象徴しています。表面に

「安らかにねむれ　わが友よ　波静かなれ　とこしえに」

の碑文が刻まれ、その中央に「戦没殉職船員名簿」が奉安されてみ霊の安らかな眠りを祈る場所となっています。

海の男と人魚の群像

祭場中央東寄りに立つ群像は、安らかな眠りからさめようとする者、立ち上って遠く海原を指呼する者、それらを慰さめ、或いは鼓舞する人魚たちと、風と波とから構成されています。これは、大きな犠牲を払った戦争への反省と、永遠の平和への情熱を呼び起こそうとするものであります。

入口正面の築山に置かれた、帆船練習船進徳丸の錨は、ここが、海にゆかりの記念碑であることを、何よりも端的に物語っています。

そして更に、これらが竣工した昭和四十六年五月六日、第一回戦没船員追悼式に当時の皇太子同妃両殿下がご台臨になられ、しとど降る雨の中を、傘も用いられず御供花御拝礼くださいました。この時のことを妃殿下がお詠みになられた御歌碑を、平成三年五月十五日に建立除幕しました。さらに、平成四年一月二十日両陛下行幸啓の折の天皇陛下の御製の碑を平成六年五月十三日に建立除幕しました。

また、昭和五十七年五月七日、昭和天皇皇后両陛下が、御供花御拝礼賜りましたことの記念碑を、植栽の北東側に建立いたしました。

これらをとりまいている、桜、椿、珊瑚樹など、観音崎の自然の息吹く丘の上の広場のすべてをもって私どもは、〝戦没船員の碑〟と呼んでいます。

春爛漫の桜花、秋万山の紅葉。そし

御製碑　御歌碑　副碑

天皇陛下御製碑

戦日（いくさび）に逝きし船人を
悼む碑の彼方に見ゆる
海平らけし

平成四年、行幸の際の御製
平成六年五月十三日除幕式

皇后陛下御歌碑

かく濡れて遺族らと祈る
更にさらにひたぬれて
君ら逝き給ひしか

昭和四十六年、第一回追悼式
ご臨席の際の御歌、平成三年
五月十五日除幕式

て四時絶ゆることのない潮騒にかこまれた〝戦没船員の碑〟は、亡き友への鎮魂と、海洋永遠の平和を祈る聖地となって、訪れる人びとに、その心「安らかにねむれ　わが友よ　波静かなれ　とこしえに」を訴え続けることでしょう。

碑の概要

所在地　横須賀市鴨居四丁目
　　神奈川県立観音崎公園内
面　積　四、二八八平方米
碑文石　黒御影石　縦〇・九米
　　横八・五米
祭　場　白御影石敷　四五〇平方米
大碑壁　白磁性タイル張　高さ二四米
建立記・追悼式記録　黒御影石刻り
設　計　東京芸術大学名誉教授
　　吉村順三
群　像　ブロンズ像　東京芸術大学
　　名誉教授　菊池一雄制作
碑　銘　千葉大学助教授　瀧　徹制作
施　工　株式会社　竹中工務店
起　工　昭和四五年六月三〇日
竣　工　昭和四六年三月二五日
交　通　①JR横須賀駅又は京浜急行横須賀中央駅から観音崎行きバスで約三十分
　　②京浜急行浦賀駅から観音崎行きバスで約十五分
順　路　①②とも終点から徒歩で約十五分

戦没殉職船員追悼式

慰霊と海上永遠の平和を祈念するため毎年五月十五日（土・日の場合は繰り上げ）全国の遺族、関係者大勢により追悼式が行われます。

なお、戦没船員の碑に皇室及び皇族方が行幸啓、ご供花賜りましたのは次のとおりです。

昭和四十六年五月六日　第一回追悼式
　皇太子同妃両殿下
　（現天皇皇后両陛下）
昭和五十三年五月四日
　高松宮同妃両殿下
昭和五十五年五月十五日　第十回追悼式
　高松宮殿下
昭和五十七年五月七日
　昭和天皇皇后両陛下
平成二年五月十五日
　第二十回追悼式
　皇太子殿下
平成三年五月十五日　皇后陛下御歌碑除幕式及び第二十一回追悼式
　皇太子殿下
平成四年一月二十日
　天皇皇后両陛下
平成六年五月十三日　天皇陛下御製碑除幕式及び第二十四回追悼式
　皇太子同妃両殿下
平成七年九月十四日
　天皇皇后両陛下、清子内親王殿下

※本稿は財団法人　日本殉職船員顕彰会」（左記）発行の冊子より転載しました。

〒102　東京都千代田区麹町四－五
　海事センタービル2F
TEL　03－三二三四－〇六六二
FAX　03－三二三四－〇六八二

靖國神社を崇敬しお護りする
奉賛会に入会しましょう
護国の英霊の鎮ります靖國神社の末永き御安泰のために、御祭神に最も身近かな私どもは全員が奉賛会に入会しましょう

コスラエ島（旧クサイ島）の近況

会友　安東正夫

旧南洋群島の主な島々を訪れるとの念願（慰霊と自らの慰労を兼ねて）を発起してから二十年を経て、短期日ながら、やっとクサイ島に到達できた。最終に相応しい印象的な島であった。日本統治当時のクサイ島というのは独特の語感があり懐かしいものであったが、近年はコスラエ島と呼ばれるようになり、ミクロネシア連邦の州となっている。伊豆大島ぐらいの大きさで、火山性のどっしりとした構造を持ち、最高地点は六二九メートルとかなりの高さである。

この島には長年、小さな飛行場しかなく、ポンペイ島（旧ポナペ島）から不定期に小型機が飛ぶ他は船便しかなくて、従来は行き難かった。その後、一九八六年に島の北側、タホンサック海岸に立派な空港が造成され、グアム島からハワイ往きの幹線便が（マーシャル群島経由と交互に）寄港するようになり、ポンペイ島から四十五分ほどで着くようになった。島の中心部にあるレロ島まで車で十分ほどの距離である。

コスラエ島は小さいながらも、六千人の人口と独立王国以来の独自の歴史を有する文化圏である。美しい自然と調和して、人々は素朴ながら礼儀正しく清潔に暮らしている。ここでは、スペイン領時代からキリスト教の布教が進み、洋風の文化が導入されたことが、良い感化をもたらしたのであろう。教会や十字架のある小さな祭壇を持つ家も多く、よく手入れされている。島の人々はカナカ系で、比較的色が白い。服装や生活習慣はアメリカナイズされているように見える。道を歩いていると、会う人々はよく会釈してくれ、車は大抵徐行してくれるし、実によく笑顔で声を掛けて乗せてくれようとする。椰子は無論、道端に熟したバナナ、パパイア、パンの実、オレンジ（皮が厚く淡白な味）などがたわわに成っていても、勝手に取る人はいない。裾礁内の浅瀬やマングローブ林で魚が容易に取れても、その日に自分が必要とする以上には取らないという具合だ。

島の中心は、戦前から東側のレロ島であるが、対岸のインネム地区に官公庁、市場、商店、学校、病院、ホテルなどの施設が拡がっている。ほとんどが平屋建てのものだ。インネム地区には、かつて南洋興発の事業場があり、肥沃な土地であったが、現在、農業はあまり活発には見られない。ホテルは全部で五軒ほどであるが、モーテル風の簡素なものばかりだ。

レロ島は本島側と堤道で結ばれ、片側が港になっている。波静かな良い港のようだ。旧飛行場もここにあった。全周で二キロ弱ぐらいの小さな島だが緑が濃く、風光明媚だ。波静かな海岸に沿って民家や商店が並び建ち、対岸から見ると彩りが綺麗である。島の中央部にはレロ遺跡がある。ポンペイ島のナン・マドール遺跡に似て、ひとまわり小さいが、柱状玄武岩で築かれた古代王の城址である。海水を引いた濠らしいものも残る。この正面には、小さいが博物館もある。島の北部には白亜の教会が建つ。一部は戦前からのもので、明るく開けた環境によく調和している。

このレロ島から本島の中央部を振り返ると、北部のマタンテ山から最高峰のフィンコール山に連なる山並みの形が、あたかも美女の寝姿のように見え、コバルトブルーの海面に映えて印象的である。胸乳が婉然（えんぜん）として初々しい感じで、日本人は「乙女の乳房山」と名付けていたが、現在はスリーピング・レディ（眠れる淑女）と呼ばれる。この山々も含めて、コスラエ島の山々は鋸の歯のように峨々として嶮難錯雑の様相を呈し、湿気を含んだ風がこの山岳を吹き上げるせいか、雨雲が多い。ミクロネシアというよりは、タヒチ島などポリネシアの貌（かたち）を想わせるようだ。山側には、天に摩するようなパンの実、マンゴー、ネム、ガジュマルなどの巨木も目につく。

レロ島の教会と眠れる淑女の顔

インネム地区から南へ向かった高台には、クサイ神社があった。今は朽ちて草蒸し、石段と石の鳥居の一部だけが残るのは、歴史と歳月の無情さを思い起こさせる。戦前の最盛期、居住していた七八〇人の邦人には忘れ難いものであろう。この先のマーレム地区の中心を流れる川の河口近くが整地されて、「友好の塔」という戦没者慰霊碑が建てられている。ここの山中には南洋第二支隊本部が置かれており、支隊戦友会がその跡地に建てた慰霊碑が昭和五十七年（一九八二年）、タホンサック方面に布陣の第一〇七連隊の戦友会と合同して現在の場所に建て直されたものである。両戦友会は団結が堅く、友好に貢献している。

旧南洋群島最南端に位置するコスラエ島には、開戦時には海軍若干が駐屯しているのみだったが、戦局の進展による米軍の反攻に備えて、昭和十八年末に歩兵第一〇七連隊の一部（連隊長・山中万次郎大佐）が、次いで十九年初

めには満州で再編された南洋第二支隊（支隊長・原田義和少将、後に中将）が進出、陸海軍合わせて四、五九四名の将兵が原田少将の指揮下に入った。

両部隊上陸の直前にはギルバート諸島が玉砕し、忽ちクサイ島はほとんど最前線に立ち、米軍の上陸が懸念されるに至った。制海・制空権を奪われて孤立無援となり、以後補給もほとんど断たれてしまう。こうした困難な状況下、部隊将兵は夜を日についで、ジャングルを切り拓き、陣地や屯営地の構築作業に奮迅する。第二支隊の主力はマーレム奥のエセン山―武勲山の線に複郭陣地を、また全島要地に掩蔽壕や防護柵を設けた。

軍は展開当初より熾烈な空襲を受けるが、原田支隊長の巧みな指導の下、兵員はなるべく姿を露わさず、応戦も最小限にする代り破壊された施設は即座に修復したという。これは米軍には薄気味悪く見えたらしく、地下要塞がよほど堅固で、兵力も多いかと過大評価して敬遠してくれたこともあり、上陸は避けられた。（飛行場が未完成だったのも結果的に幸いしたのかも知れない。）

かくて、クサイ島の戦争は空襲と飢餓との戦いに終始し、陸海軍で五二一名の戦死・戦病死（多くは栄養失調）を出しながらも、よく終戦まで任務を完遂する。豊かな島とはいえ、この小島に四、六〇〇名は大兵員であり（他に一般邦人、島民や収容されたオーシャン島民もあり）、サツマイモ等の栽培で破局は免れたものの、食糧不足は深甚であった。一方、島民の被害は、一部強制移住もあったが、軍とは隔離され、しかも軍は困窮しても島民の食糧等は取り上げないという軍規が守り抜かれたため、非常に少なかった。

その頃を偲んで詠まれた歌に将兵の衷情がにじむ。

甘藷の葉に　骨をけづりて
血のにじむ　孤島の守り

蒼空に　眼あぐれば
灼くがごと　命揺ぎて
（佐々木永助）

君は死に　われは生き来て夕映ゆる
丘よりとほき　わたつみの声
（佐藤　任）

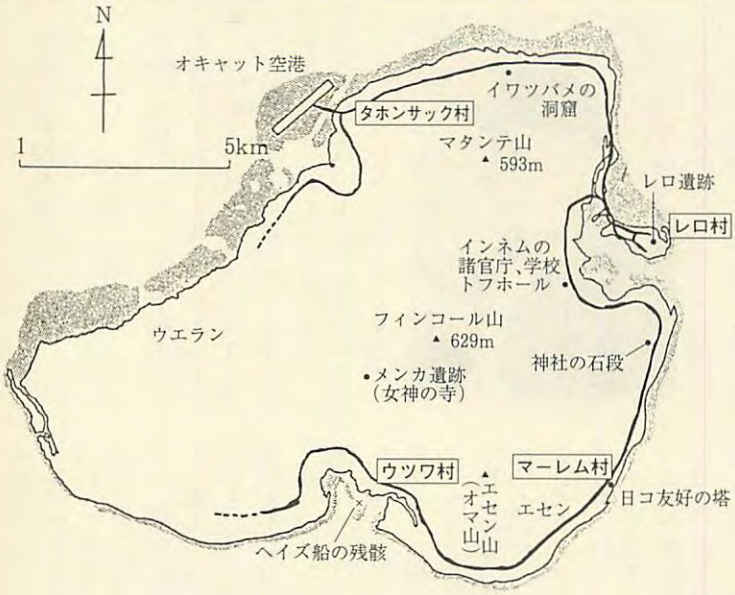
現在、軍の遺構は、レロ島南部のエセン・ウツワ海岸などにトーチカ、レロ湾に戦車と舟艇の残骸が残る他は、ジャングルに埋もれて見付けることは難しい。故熊谷泰視中尉の「クサイ（久歳）島の唄」の抒情を記憶する人も次第に少なくなってゆく。

一、多恩の浜の　夕凪に
波と戯むる　兵よ
あ、胸にしむ　雲の色

二、渚の独木船に　月待てば
土人の唄の　かなしさよ
あ、故郷の　空遠し

以来、無慮五十星霜。コスラエ島はこのように、わが国との歴史に汚点なく、美しい自然が開発や汚染から守られて、島の人々は平和に暮らしている。星月夜の浜辺は神韻縹渺の情感に溢れる。日本人には魅力的な地ではあるが俗化を助長するようなことはせず、時に日常を反省し、心の奥深い所で浄らかさと安らぎを回復してくれる、母なる故郷と考えるべきであろう。

☆本稿は「南洋群島協会会報第二一四号」に掲載されたものを同会と筆者のご諒承により掲載しました。



徳原　勇様を偲んで

東京都　佐竹　エス

徳原　勇様はかねて病気療養中のところ平成八年七月十四日、享年七十五歳を以て逝去され、同月二十四日にハワイで約百五十人の親しかった方々の会葬を頂いてしめやかな裡にも盛大な告別式を行ない、生前の希みどおりハワイに納骨されたとのことです。

徳原様御夫妻との長いおつき合いの中で特に印象深いことを申しあげて、御冥福をお祈りいたします。

昭和四十二年に、故浮田さん（当時は常任幹事）と南方諸島の調査、慰霊に行ったとき、マジュロでパシフィックアイランダー号から下ろした膨大な荷物（各島用の墓標〈角材〉、その他の器材、半年分の食糧、生活用品等）の運搬と整理に、途方にくれていたとき、助けて下さったのが徳原様です。

徳原様はハワイ生まれの日系二世でクェゼリン島実験部隊に勤務していましたがマジュロに伝染病が発生したため帰島できず、滞在していたのです。地獄で佛とは正にこんなことと思いました。二週間程の間徳原様と、山田徳子様が毎日のように来て下さってマーシャル群島事情をくわしく教えて下さり、要人への紹介その他貴重な助言を頂きました。これはその後の私共の行動に大きな力になりました。

クェゼリン環礁では、九五二航空隊基地のあったイバイ（エビゼ）島にのみ上陸を許され八月十四日に徳原様と中田イサム様がお見え下さいました。クェゼリンの様子や、司令官が私共の任務に好意的であること、クェゼリンとロイ、ナムル（ルオット）には立派な日本人墓地が作られ、奇麗な日本の花が咲いていると伺い、その写真やスライドを頂き、感激いたしました。

私共が任務を終えてマジュロを出港した頃、徳原様と山田徳子様は華燭の典を挙げられ、九月二十一日のクェゼリンでの披露パーティにはミラー司令官をはじめ二百人もの来賓の祝福をうけられたそうです。

クェゼリンの慰霊碑の建立に際しては、日本人の入域が許されないので、資材のすべてを船便で送り、建立の作業を司令官にお願いしましたところ、司令官はこの作業を徳原様に命じられました。作業は、日系の中田　勇様、大里　清様、チェンバレン御夫妻様、その他各国の基地勤務員の御奉仕で進められ、十二月一日の落成式には軍の幹部をはじめ大勢が参列しました。（環礁13号10頁参照）

図面と仕様書だけで正確に建立工事を完成されたことを会の役員が確認したのは、五十年八月十五日の現地慰霊のときでした。慰霊碑を拝した参列者一同の感激は一入でした。

平成元年一月二十六日
クェゼリン司令部前
後列中央　ハリス司令官
後列向って左端　徳原勇様

徳原様がクェゼリン勤務を退職してハワイに移住された後も、私共のクェゼリン墓参の時、ハワイから生花を持って一緒にお詣りされたことも幾度かありました。

本会の現地慰霊は九回になりましたが、ルオットだけは軍極秘の島ゆえに中々許されません。佐藤会長がチャップマン司令官に懇請を続けていたところ、昭和六十三年になって、後任のフィリップ・R・ハリス司令官から思いもかけず、許可状が届き、厚生省の了解のもとに入域を申請しました。

平成元年一月の、政府派遣慰霊団のうちルオットの遺族七名は胸をふくらませて参加しましたが、何故か直前になってルオット行きは中止となり、各人の用意したお供え物は墓参に来て下さった徳原様に代参をお願いして後にその時の写真が全員に送られました。

その年の八月、佐藤会長を団長に十五名が初めてルオット島慰霊に上陸した時の感激は今尚忘れられません。

徳原様御夫妻のあとを、ホール秋様、ラポイント英子様、クーロング節子様御夫妻、その他の皆様が引きついで御奉仕下さっているのはまことにありがたいことと思います。

徳原様　ほんとうにありがとうございました。

安らかに　おやすみください。

合掌

鎮魂　五十年記念誌

「南十字星」刊行

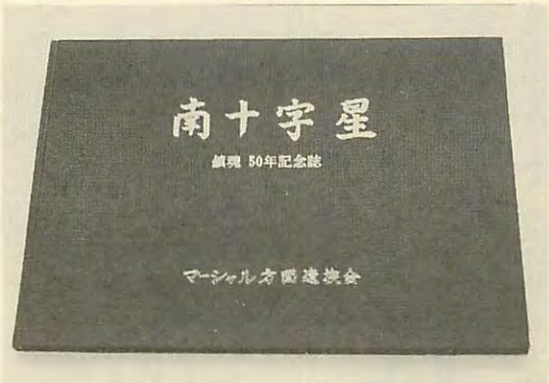
平成七年二月、五十年祭記念行事の一環として記念誌を刊行しました。

御入用の方に、申込順に在庫限り一部五千円（送料共）でお頒けしております。代金は郵便振替で前納下さい。

A4版68頁　題字は大給相談役御揮毫

内容は写真記録20頁、戦域の状況11頁本会のあゆみ17頁、年表10頁ほか。

上製本（濃紺クロス貼　題字金箔押）



寄付者芳名

（敬称略・順不同）

次の会員及び会友の皆様は年度会費を完納された上更に慰霊奉賛のため浄財を御寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。

今後とも本会の永年存続のため何分の御協賛を切にお願い申し上げます。

宮城県　伊勢　照男
茨城県　鈴木　藤太
埼玉県　中根　杉子
新潟県　松岡　イキ
長野県　綾部　はつゑ
愛知県　岡島　みね子
香川県　石川　正興
福岡県　村上　清隆
熊本県　北村　権蔵
鹿児島県　丸田　キワ

篤志会員・会友等　クーロング　節子
香月　正紀　郡　義典　高橋　正吉
佐久間フミ子

以上は平成八年六月一日から十一月三十日までに、寄付された方々十五名で、その合計金額は二十六万二千円でした。

ロイ・ナムル（ルオット）のクーロング節子さん里帰り

ロイ・ナムルの墓苑をボランティアとしてお守り下さっている節子さんが御夫君のリチャードさんと共に福岡に帰省し、御夫君は仕事の都合で一足先に帰国された。御夫妻は時どき墓苑の清掃をし、赤飯、煮物など日本の食べ物を作ってお供えしてねんごろにお参りして下さっている。

十一月十三日、会の有志が節子さんを横浜にお招きして懇談した。丁度今秋一番の寒い日となって風邪をひかせてはと心配したが無事に帰国された。

前列向って左より2人目　クーロング夫人

名簿訂正 (11)

◎　平成3年8月15日発行の会員名簿を次のとおり訂正いたします。

<頁>	<氏　名>	<訂　正　事　項>
26	鵜沼久義	〒970 福島県いわき市平下荒川字久世原6－96　☎0246－28－8687　戦歿者鵜沼武男　続柄子　所属部隊昭福丸　戦歿年月日17.8.7　戦歿地マロエラップ<新入会>
27	鈴木藤太	〒318－01 茨城県高萩市下君田1134　☎0293－28－0200　戦歿者鈴木八十次　続柄子　所属部隊昭栄丸　戦歿年月日18.12.19　戦歿地クェゼリン<新入会>
27	近藤芳雄	〒323 茨城県小山市神鳥谷1891－1　☎0285－28－2598　戦歿者近藤豊作　続柄長男　戦歿年月日19.2.6　戦歿地ルオット<新入会>
56	東地井（トチイ）義訓	〒619－02 京都府相楽郡木津町相楽新堂前1－2　☎0774－72－2852　戦歿者東地井作次郎　続柄子　所属部隊63警　戦歿年月日20.1.26　戦歿地マロエラップ<新入会>
77	郡義典	〒516－02 三重県度会郡南勢町田曽浦3597　☎0599－69－2198<会友　新入会>

（1頁より）

九段会館　宿泊部
〒102　千代田区九段南一－六－五
電話　03－三二六一－五五二一

◎当日は受付け付近の混雑が予想されますので、年会費、寄付、直会参加費、九段会館宿泊料などは、二月中に到着するようお振り込み下さい。

当日の受付は、原則として参加者の確認だけにしたいと思います。

◎ことしの奉納芸能は、会員・会友の御協賛を頼りにしております。詩吟、謡、歌唱、尺八、ハーモニカ、指笛などを御披露下さる方は前日までに御連絡ください。

平成七年秋　南佐渡吟行

新潟県　斎田　よしえ

段丘の椿尾に入り日かがよひて潮風に蕎麦の花のゆれをり
祖父が住みしみさき本町経巡りて白鬚の長き面影偲ぶ
錦なす紅葉の陰にくすみたるなつはぜに黒き実のゆれゐたり
師が住みし松ケ崎あたり顧みれば寄せては返す磯波ばかり
摩崖仏に到る階登り行けば菩提樹の実の零れ落ちけり
光背つき八十八体石仏は祈り唱ふがにゐならび給ふ
訪はむと思ひ初めしより五十余年今し小比叡の山門くぐる
あぢさゐの末枯るる黄葉取り取りの深みし色に心和みぬ
小木の岬に耀ふ夕日はみ仏の如く船の窓よりをろがむ

訃報

マーシャル諸島共和国のアマタ・カブア大統領閣下には、昨年十一月よりホノルルの病院に入院加療中のところ、十二月二十日御歳六十八歳を以て逝去されました。
謹んで哀悼の意を表し御冥福をお祈りいたします。

本部だより

☆お便りをお寄せ下さい

この「環礁」を、同じ境遇の仲間たちの心のふれ合いの場としてお気軽に御利用下さい。身の周りのこと、趣味やレクリエーションのこと、この会に対する御要望、御意見などをお寄せ下さい。採否と多少の手直しはあらかじめ御了承下さい。

☆入会のおすすめ

本会は、会費を納めた者を会員として登録し二月と八月に会報「環礁」をお届けしております。

マーシャル諸島とギルバート諸島方面の戦歿者の親族ならば誰でも、又、御一柱に何名でも御入会頂けます。同方面に勤務された戦友の皆様には会友として御参加頂いております。会員、会友とも会費は一ヶ年二千円で入会金は要りません。

☆会費完納のおねがい

本会の活動に必要な経費はすべて会員と会友の浄財だけで賄われており、他からの補助等は一切ありません。会を長く続けてゆくためには財政の安定が是非とも必要でありますので、会費の完納にご協力下さい。会費を納めない方は退会の申し入れがあったものとして、会員名簿から削除し、「環礁」の発送を中止しますので、事情御賢察の上悪しからず御了承下さい。

本部
〒103　東京都中央区日本橋人形町一－八－二（泉商事ビル）
マーシャル方面遺族会
電話〇三－三六六一－八七六〇
FAX〇三－三六六一－六二四一

謹賀新年

平成九年元旦

◎本会役員及び篤志会員

顧問　栗林徳五郎　監事　佐竹エス
相談役　大給（オギュウ）湛子（キヨコ）　同　高橋鎮夫
会長　佐藤宗丕　篤志会員　有田年（ミノリ）
常任幹事（会計）黒川誠　同　徳原徳子
同　畫間樂平　同　並木進
幹事　荒木常子　同　長谷川栄次
同　石谷典夫　同　長谷川敏
同　内海淑子　同　松平永芳
同　高林芳夫　同　山村要
同　山口良二